
動物恋愛相談所～恋のお悩み解決します～

日平 雅人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

動物恋愛相談所〜恋のお悩み解決します〜

【Nコード】

N3965J

【作者名】

日平 雅人

【あらすじ】

擬人化した動物達が、貴方の恋のお悩みをズバッと解決致します！「動物恋愛相談所」本日オープンです！！・・・的なストーリーです。ちなみに主人公は普通の人間・・・。コメディ&ギャグ重視の恋愛動物コメディ小説です！！

第1話「強気な猫とツッコミン少年」(前書き)

この小説は不定期更新です。そこの所よろしくお願いします!!

第1話「強気な猫とツッコミ少年」

ハロー皆さん！

突然ですが質問です！

貴方の好きな動物って何ですか？

んで、もし貴方の好きな動物が擬人化して、しかもめっちゃ自分の好みの異性として貴方の目の前に現れたら、どうする？

え？そんな事は絶対にならない？

まあそう言わずに想像してみてくださいよ。

知的でクールな犬耳ボーイや、キュートで愛らしい猫耳ガール。
もちろん尻尾付き！

え？発想がキモい？

そんな事言ったってしょうがないじゃん。

だって今、俺の目の前には・・・

まあとりあえずは自己紹介でもしておこう。

俺の名前は川口信良。

現在15歳、中学三年生。

好きな食べ物はフルーツ全般。

得意な教科は数学。

ゲームや漫画大好きの普通な中学生だ。

そんな俺には今、少し気になっている人がいる。

同じ松山中三年三組の寄居真理子さん！

勉強ができて、スポーツもできて、おまけに超可愛い！

まさにクラスのアイドルだ！

本当は真理子さんといろいろとお話したい、一緒にデートしたりしたいんだけど、超内気な俺では真理子さんに話し掛ける事すら出来ない。

中三と言えばまさに高校受験真っ只中。

それが追い打ちをかけ、受験勉強で忙しそうな真理子さんに声を掛ける事が何だかアウト的な感じがしてならない。

「もうすぐで中学卒業・・・真理子さんとは別の高校だから、いい加減話し掛けないとな・・・後々後悔しそうだし」

学校からの帰り道、俺が一人で下校をしていると・・・

「にゃ～おん」

足元から声が。

「んあ？」

足元を見ると、そこには一匹のトラ柄の猫が。

「にゃおくん」

猫は俺の足に擦り寄ってくる。

「何だ？猫か？」

俺はその場でしゃがみ込み、猫の頭を撫でてやった。ぐるぐると喉を鳴らし、気持ちよさそうに目を細める猫。

「かわええな・・・」

猫愛好家の俺は猫の顎や頬っぺたを軽く撫でてやる。相変わらず気持ち良さそうにしている猫。

「さて、そろそろ帰らないと」

俺は猫を撫でるのを中断し、その場で立ち上がる。

「じゃあな猫」

俺はそう言って立ち去ろうとした。

その時・・・

「アンタ、今片思いしてるでしょ？」

どこからともなく声がした。
俺はその声にビックリ、辺りを見渡す。
すると……

「顔を見りや分かるのよ、アンタかなりのオクテみたいだし」

「だれ？」

「しかもルツクスは微妙だし、髪もモサツとしてるし」

「あ、もしかして神様！？天の神様の声！？」

「おまけに男のくせに猫好きだし」

「神様あゝ！男でも猫好きは沢山いるんですよ……ってオワッ
！！」

俺はその一瞬で腰を抜かした。

「あ……あああああああ！！」

今、俺は見た。

確かに今、この両目で見た。

「まあよし、ではこの私がアンタの恋に一役買いますか」

今俺の目の前には一人の少女がいる。

しかし、その少女は……猫だ。

え？何言ってるか分からない？

では、分かりやすく単刀直入に言おう。

今さっきまで俺が撫でていた猫が・・・人間に変身したのだ。

「あわわ・・・！」

化け物！って言おうとしたけど、あまりの驚きと恐怖で声が出ない。

「・・・ねえちょっとアンタ、話聞ってる？」

少女はしりもちを着いて硬直している俺に向かい、軽くガンを飛ばしている。

しかし、俺の頭の中では違う事を考え中。

(ね、猫耳に猫尻尾・・・ってか、エーっ！！！！！！！！！！)

俺は気を失いそうになった。

意外や意外、その少女が結構可愛いのだ。

「私はミィ。動物恋愛相談所の一員で・・・」

少女は何やら説明を始めたが、俺の耳には入って来ない。

その時

ズサッ！！

「ギャー!!」

頬に走る鋭い痛み。

俺は右手で頬を触ってみた。

何だか軽く濡れている感覚・・・ってこれ、血だー!!

俺は少女の方を見る。

少女は少しイラついた目をしていて、その両手からは鋭い爪が見えた。

「とりあえずアンタ、人の話を聞きなさい」

「この世界に生を授かる動物の中には、極稀に人間の姿に変化出来る“半獣”と、言われる動物が生まれる事がある。

犬、猫、鳥、馬、牛、鼠、蛇、狐、鯨、熊、猿、虫、魚、豚、狸

などなど、この世界中の生物で、人間以外の全ての生物に“半獣”が生まれってくる可能性がある。

半獣は自らの気を集中させる事で、個々の生物から人間の姿に変化する事ができる。

しかも、半獣の知能は人間並にあり、その半獣が生まれた土地の語源なら、動物の骨格状不可能でも話す事ができる。

しかし、多くの半獣は人間の姿にならず、獣のままで一生活を過ごす事が多い。自らが半獣だと自覚していない事が多いからだ。

その場合、その半獣は人間に変化する事をしないので、さらに自分が半獣である事を知る機会がないのだ。

人間に変化出来る半獣のほとんどは、まだ小さい時に何らかの理由で人間の姿になり、それがきっかけで自分は半獣なんだと自覚させられる場合が多い」

そこまで言う少女　　ミイは手元の本、表紙には（半獣について）と書かれてある本を閉じた。

「今のが半獣の基本知識。えっと、次は・・・」

「説明が長あ〜い！」

俺は思わずツッコミを入れる。

「お前、読者なめるなよ、ほとんどの人は説明文長いと読むのやめて違う小説読み始めちゃうんだぞ」

「つたく、人がせつかく丁寧に説明してあげてるのに、うるさいガキだ！」

「うるさいとはなんだ！っーか突然“半獣”とか言われても混乱

するだけだ!!」

「馬鹿ガキ（小声）」

「今お前人の事バカって言ったな！絶対言ったなバカって!!」

「バカじゃない。ウマシカだ」

「知るかー!!」

ぜえぜえと息が荒くなるのが分かる。

とりあえず落ち着こう俺・・・

確か学校からの帰り道で猫に出会い、その猫が人間になって、俺の頬から流血させて、どっかから分厚い本を持ってきて、長い説明を始めた。

なるほど、理解出来た・・・って出来るかあ!!

「・・・アンタ、さっきから一人で何ごちゃごちゃやってんの？」

おっと、俺とした事が、軽く取り乱してしまった。

「・・・お前は何者だ??」

1番気になる事をどストレートに質問。

「だから、私は猫半獣のミィ。動物恋愛相談所の社員よ」

「・・・その、ドウブツレンアイソウダンジヨってのは何だ？」

「何でカタコト言なのよ・・・動物恋愛相談所つてのは、私達半獣が人間の恋を応援する会社の事」

「・・・何故、は、半獣が人間の恋を応援する？」

「うーん・・・ぶつちやけ、人間の心理について興味があるから」

「・・・は？」

「あのね、ほとんどの半獣は人間にキョーミを持つものなの。私の場合、人間の心理や考えにキョーミがあつて・・・」

「・・・」

俺は改めてミィの方を見してみる。

黄色い大きな瞳、茶色の短い髪、頭の側面（と、言うより上部）からは髪と同じ色の獣の耳、いわゆる猫耳。

体は普通の人間と同じで人間の皮膚、人間の爪（にしてはやけに鋭い）、二足歩行の足に二本の腕。肉球のかけらもない。

そして、腰の辺りからは茶色い尻尾。ちょうどズボンとシャツの間からよろつと生えている。

あ、ちなみにミィは変化した時から服、ズボン、靴は着用済み。

「・・・何じろじろ見てんのよ」

「・・・俺帰る」

かばん持った、手提げのバック持った、よし帰ろう。

「あ、ちょ、待ちなさいくらー!!」

俺は全力疾走！

クラスで14番目に速いこの俊足を見よ！！

「待ーちーなーさーいー！！！」

背後から恐怖の音が・・・振り返えったら終わりだ俺、前だけを
見て走るんだ！！

ガブっ！！

「ギャー！！！」

なっ！？突然左足に激痛が・・・ってうわっ！！

俺の左足に一匹の猫が噛み着いている・・・！

このトラ柄猫はまさか・・・！！

「はひははい！！（待ちなさい！！）」

「ああああああああああああ！！！」

なんじゃこりゃ！！

もう何回路地裏を曲がっただろうか・・・

俺はミイに連れられ、半ば強引にドウブツレンアイソウダンジヨに連行されている途中だ。

目の前には猫、左右はビルの壁、下はマンホールだらけの細いアスファルトの道。

・・・俺、無事に帰ってこれるかなあ？

「はあく着いた！ここが本社よ」

どれどれ・・・って、ただの廃ビルじゃねーか！

「ここは滅多に人間が来ないから、経営にはうってつけなのよ」

「滅多につて、これじゃ人が相談に来ないだろ？なんで儲かるのか？」

路地裏のまた路地裏、こんな所に建てたって人は気付かないだろ。

「あのね、半獣は自らが決めた仕事の客以外には存在を明かしちゃいけないの。じゃないと世界が大混乱に陥るわ」

「んじゃ、客として半獣の存在を知った人がばらしてもしたら・・・」

「そんな事、だれも信じないでしょ」

何だかあいまいだなあ・・・。

「とりあえず、社内に入るわよ」

「・・・なんか怖いな・・・」

えーい信良、男ならこのくらいで怖がるな!!
自らに喝だ!!

「・・・あのさ、その社内にはお前以外にどんな半獣がいるの?」

これだけは聞いておかないと。

ライオンなんかいたらパクつといかれそうだし。

「えーと・・・狐に烏に犬にクリオネ」

「クリオネ!?!」

なんと言う微妙な生物・・・

でも、人間を襲う動物はいないみたいだ。

では、いざ社内へ!!

3階建てのボロビルの2階に相談所はあった。

「ただいま!!」

ミイが勢いよく扉を開ける。

「お、お邪魔します・・・」

そーっと中を伺う。

「おう、ミイ。帰ったか」

「あ、社長!お客さん連れてきたよ!!」

社長?誰それ?あんたが邪魔で中が見えない。

「でかした!いまから茶入れるから」

社長?の声が遠ざかっていくのが分かる。

「さ、アンタ。中に入って!!」

「あ、ああ・・・」

この部屋の第一印象、

なぜ窓ガラスがわれてるの!?

第二印象、

獣臭い・・・

第三印象、

部屋の入口のすぐ脇にでっかい水槽あり。

中にはクリオネが一匹のみ。

こいつがアレか？先程話しに出たアレか？

「おう、坊やが客かい??」

この声はさっきの社長の声!!
振り返った俺が見たものは・・・

黒いスーツ、黒髪七三分け、目つき鋭い、革靴、背中からはでかい黒い翼・・・コイツ多分鳥だ。

「俺はこの動物恋愛相談所の社長、ブラック・クロウソード、鳥半獣。よろしく」

ぶ、ブラック・クロウソードが名前!?中二のネーミングセンス・・・

「はあ・・・」

何と答えればいいのか・・・

「あ、お客!?!」

お、なんだ？今度は部屋の奥から元気そうな少年が走ってきたぞ？

「おいらポチ太郎!よろしくな、客!!」

ポチ太郎って、ハ○太郎のパクリか?・・・ってそれ以前に礼儀がなあってねえ!!

ポチ太郎・・・犬だなこりゃ。

犬耳にフリフリ尻尾。多分パピヨンか何かだろう。

「こらポチ太郎、お客様にその態度は失礼ですよ」
また何かきた・・・

うーん、黄色っぽい耳にふんわりした尻尾。

「私はフコンと申します。よろしくお願ひします」

フコン・・・コン・・・あ！狐だ！！

ポチ太郎とはまた180度違う、大人しそうな女性だな・・・

で、残るは・・・多分・・・

バシャっ！！

うわっ！水槽の中に人がおる！！

あ、この幼児みたいなちびっこはまさか・・・

「あたしはジヨニー山田よ。よろしくね」

頭に生えるその触感らしきもの・・・クリオネか・・・ってジヨ
ニー山田って何！？

「ミイ、ポチ太郎、フコン、山田、みんなウチの社員だ」

ブラック・クロウソード・・・めんどいからブラックさんでいい
や。何？そのどや顔？

「そう言えば、まだ君の名前聞いてなかったね」

「か、川口のぶ・・・」

「川口信良15歳男性、松山中学校三年三組在籍、自宅住所は〇

〇県〇〇市〇〇〇マンション201号室にて、父、母、弟一人、妹一人との5人暮らし。趣味は散歩、果物大好き、数学が得意」

「・・・俺、今名前言うとしたら・・・何か個人情報が聞こえたんだけど。」

何かジョニー山田がファイル開いて音読してるんですけど。個人情報なんですけど・・・

「何なん・・・」

「・・・帰りてえ」

さっきからシッコミばっかで疲れた。

「つまり、川口君はその・・・寄居さんの事が好きなんだ」

「はい」

ブラックが俺に質問を問い掛け、疲れ果てている俺は抵抗する気

力がなく、素直に洗いざらいに喋ってしまった。

真理子さんへの気持ちの事とかを・・・

「って事は、今回、川口君とその寄居さんをくつつける事が俺らの仕事になる訳だ」

ブラックはここで茶をすする。

隣ではフコンが器用にメモをとっている。

一応、なんか相談所っぽい雰囲気の流れてる。

・・・隣のソファアーではミイが猫の姿で熟睡中、ポチ太郎とジヨニ山田はあつちでDSやっている。

前言撤回、相談所っぽくない。

「よし、分かった。じゃあ早速作業に入りますかな」

あ、ブラックが烏に変化した。結構でけえ。

「じゃ、いまからその寄居って奴のストーキングをしてくる。フコン、留守任せたぞ」

「はい」

ブラックはわれた窓ガラスをくぐり、外へ飛んで行ってしまった。

「・・・あの、フコンさんだっけ？」

「あ、はい」

薄い黄色のふわっとした長めの髪、透き通るような瞳、細く色白な体。狐耳に狐尻尾。
結構綺麗だ。

「俺、もう帰っていいのか？」

「あ、構いません。どうぞお気をつけて」

じゃ、と返事をし、やっとこさ相談所から解放。
もう夜だし。

半獣か・・・

何か信じられないなあ・・・

第1話「強気な猫とツツコミ少年」(後書き)

今回のこの小説、一応短期連載の予定でいます。

しかし、結構人気があったり、アクセス数があったりしたら長期連載になるかも。

全ては人気次第と言う事です。

次回、ストーリー本格始動

これでよし。

カアア！カアア！！

あれ、今確かにアラームのスイッチ押したはずなのに……ってカア？

カアアアアア！！

さつきまでの躊躇いを忘れ、ガバツと布団から飛び起きる。目覚まし確認、アラームは止まっている。

カアアアアア！！

……何か外から聞こえる。
カーテンオープン。

「……え？」

窓の外にはでっかい鳥が一匹。

「よお、起きたか」

……鳥が日本語を喋った。
多分、これは夢だ。

「川口君、彼女の情報入ったぜ」

「あ……」

「さっさと下りてこいよ、みんな待ってるぜ！あ、山田はいないけどな」

あー……一気に眠気が覚めた。

これ、現実だ。

俺の家はアパートの2階。
とりあえずジャンパーを羽織って外へ。

寒い……

アパートの裏側……先程鳥がいた場所へ行くと……

にゃ〜おん！！

ワンっ！！

コン！！

カアア！！

みーんな動物の姿だ。

・・・昨日のアレは夢じゃなかったんだと改めて実感。

「やっと来たか・・・遅いぞ客!!」

ポチ太郎・・・やっぱりパピヨンだ。小さいな。

「ポチ太郎声でかい。近所迷惑だ」

ブラック・・・あんたも十分声でけえぞ。

「社長、ここであんまり日本語喋ると・・・周りの人に半獣だと
バレます。一旦、相談所に戻りましょう」

フコン・・・キタキツネかな？ごもつともな判断

「え〜！せつかく来たのにもう帰るの？」

ミイ・・・お前の目的は何なんだ。

「・・・帰れお前ら」

本音が漏れる。

「んだよ、人がせつかく情報持ってきてやったのによ」

あんたは人じゃない、烏だろ。

「ま、いや。とりあえず今は一つだけ教えて帰るか」

「何が一つだ？」

「んなの決まってるんだろ、寄居真理子の情報だよ」

「えっ!?!」

な、何を言ってるんだこの鳥!?

「じゃ、今から教えるぞ・・・寄居ってやつ、今日国語の教科書忘れて学校に行った」

「は!?!」

な、何を言ってるんだこの鳥!

「だから、国語の教科書を寄居は忘れたんだよ」

・・・つまり?

「・・・お前、今日国語の時間に教科書見せてやれよ」

「はっ!?!」

「はっ!?!じゃねーよ、お前と寄居が隣の席だって事分かってんだよ」

「何故知ってる!?!?てか、今日・・・」

「いいから、お前まで教科書忘れるなよ」

「今日・・・元々国語ない」

「……………」

鳥がフリーズ

「確かに教科書見せてやるって事自体、話のきっかけを作る事は出来るけど、それだけだろ？」

「あ……あっそう。じゃ、帰る」

鳥はお空に飛んでいきましたとぞ。

「……………」

何しに来たんだ？あの鳥は。

「おい客……」

「……………信良だ」

「じゃ信良、おいらも帰るから。DSやりたいし」

「あっそう……………」

……………パピヨン来た意味ねえ……………

「……………で、お前らも帰るのか？」

目の前にいる猫と狐はさっきから黙ったまま。

「……………どうした？」

何か・・・震えているように見えるが・・・

「お邪魔するわよ」

「は!?!」

次の瞬間、猫と狐は一気に走り出し、俺の横をすり抜け、アパートの外階段を登り、ウチの前まで行くとポンツと人間の姿に変化、この間わずか3秒。

そして・・・

ガチャ!

家の中に入っていました。

「・・・は?」

フリーズor俺

約5秒後、理解完了。

「何しとんじゃ〜!」

俺も家へダッシュ!!

俺の家族は両親に弟（小六）と妹（小五）の五大家族。
アパートの部屋はキッチンやトイレ等を除いて3部屋。
両親の部屋、妹の部屋、俺+弟の部屋（兼居間）。
悲しいでしょ？中三で今だに自分だけの部屋がないんだよ？

「・・・おい」

居間。

いつもあるテーブルは隅に立てており、布団が二枚、そのうち片方ではまだ弟が熟睡中。

しかし、その隣の俺の布団には今、猫と狐が潜っている。

「・・・おい！」

あまり大きな声を出しては弟が起きる。
声は小さめ……

「……………」

強行手段に出よう。

布団の裾を両手で掴み、一気に引っ張る。

えいつ!!!

スツ!!!

「っ!!！」

布団をめくり取るとそこには二匹の獣。

「何してんだよ」

今この家にはMY Familyがいるんだぞ!

「だって……さ、寒いんだもん……」

あ?

「知らないの?猫は寒さに弱いのだ!!！」

知るかつ!!!

「猫はこたつで丸くなりたいのだ!!！」

「こたつじゃねーよ、それ布団！！」

「……………」

猫は生意気、狐は無言、面倒臭え〜！！！！

「っ！かなんで狐のフロンまでここにいるんだよ！」

「……………帰れ」

「寒いの嫌！！」

「……………帰りなさい」

「嫌」

「……………帰りんしゃい」

「あー暖かい」

「……………帰って下さい」

「ふぁ〜眠い」

「……………」

はい、強制退場のお時間です。
まずは右手で猫を掴み……

「うわっちよっ！！」

左手で狐を確保

「うっ……」

そして玄関へ直行、器用に足でドアを開け……

「お帰りはこちら」

ポイツ!!

「あゝ!!」

猫と狐は見事に着地。

「じゃ」

ガチャン! ドア閉めた
ガチャ!! カギ閉めた

「……レッツ、二度寝タイム!!」

学校遅刻してもいいや

はい、学校遅刻。

学校に登校したのは2時間目の授業中。

「川口、後で職員室」

担任に怒られる事間違いない。

「眠い」

二度寝したのにまだ眠い俺。

いつも通りに窓際の前から二番目、自分の席に着く。

「.....」

無言で席に着く。

そして、隣には.....

はぐんどまっ！..！

私ミイ、ここからの語りは私がやります!!

で、今私は松山中学校の桜の木の下にいます！
え？何でかって？

そりゃ、もちろんアイツ 信良の観察のため。

ちようどこの桜の木の枝に登ると三年三組がまる見え、しかも信良は窓際の列だからさらに観察しやすい!!

ひよいつ!!

見事、桜の木登頂完了!!!!

「さて、信良は？」

うーん、カーテンが閉まってて確認出来ない……

「あゝあ……」

つまんない。

「仕方ない、今日は撤退するかな……」

「もう少しねばれ」

「にゃ!?!」

どこからか声が……

「ト」

「ん？・・・ってうわ、社長！！」

そこにいたのはウチの社長。
もちろん烏の状態。

「何してんの社長？」

「信良観察」

「あ、私と一緒にだ！」

「そうなのか・・・で、何か信良に変化は？」

「それがね、カーテンが閉まってるって観察出来ないの！」

「・・・」

「全く、冬なのにカーテン閉めるってどんだけよー！」

「・・・」

「あゝあ・・・まだ私、寄居って子見たことないんだよねえ。
見たかったなあ」

「・・・おいミィ」

「ん？」

「前見ろ」

「前？」

私は前を向いた。

そこに見えるのは松山中三年三組の教室、もちろんカーテン閉め
き……ってえ!?

「あ……」

あ！カーテンが一カ所開いている!!……しかもそこから信良
がこつち見てる……

「帰れ」

と、言ってるんだと思う。口がぱくぱく動いてる……。

「……一旦帰るか」

「……はい」

「どうした川口？」

教師が俺にそう言ってきた。

「いや、なんでもないです」

そう言って俺は前を向く。

・・・今、あっちの桜の木に見たことある猫と鳥がいたような・・・

きつと気のせいだ。

なんなら、見なかった事にしよう。

「何してんだよ」

「ん？」

前の席の男子がこっちに向いてくる。

「なんでもない」

何事も穏便にいこう。

その日の昼休み。

いつも通り給食を食べ終え、いつも通り机に伏せて昼寝。

あゝ……

眠い……

「おい、そこの寝てる子！」

「ん！？

どこからか昼寝を邪魔する声。

「明後日暇？」

「……なんだ、お前かよ」

今、俺に話し掛けてきたこの男子は深谷。深谷秀勝、俺の数少ない友人の一人だ。

「で、信良明後日暇？」

「……一応暇」

「じゃあさ、カラオケ行かねえか？」

「はあ！？」

この受験勉強シーズンにカラオケ！？

「ほら、もう俺ら中学卒業したら別々の高校じゃん、ならば、勉強の息抜き&思い出作りと言う事でさ、どう?」

・・・断る理由なし

「ああ、いいよ。で、他のメンバーは?」

「えーっと、男子は俺、お前、幸也、孝明で、女子は新座に越生。女子の方が少ないから、あと一人二人誘おうかと」

はい、俺の人物紹介コーナー!!

超簡単に紹介します!

深谷秀勝

マイベストフレンド

日高幸也

体育系イケメンボーイ

草加孝明

インテリ君

新座葵

あんまり親しくない

越生千姫

ぶっっちゃけ幼なじみ

「・・・でさ、結局あと誰誘うの?」

「どっしようかな・・・寄居でも誘う?」

ドッキューン!!

い、今コイツ何て・・・

「別にいいよな？」

「あ、ああ」

いかん、声がかすれた

「じゃ、聞いてくる」

そう言って秀勝は教室の後ろで友達と話をしている寄居さんの元へ・・・

つーかこの展開、奇跡だ！！

俺はこの時、まだ知らなかった。

教室の後ろにある水槽の中、クラスで飼っているグッピーに混じって一匹、クリオネがいた事を。

そして、そのクリオネが今話を聞いていた事を・・・

「社長に報告しなくちゃ！！」

第2話「国語の教科書貸してあげる作戦」(後書き)

もう気付いている人はいると思いますが、作中の登場人物(人間)の名字は全て埼玉県の市町村から取っていたりしています。

以上、どうでもいい話でした。

第3話「川口信良捕獲大作戦」

あゝ！！

今日は学校でいい事がありました！

え？何かって！？

それはね・・・

「やつほゝ！！今度の日曜日は真理子さんとカラオケだゝ！！」

まさに奇跡ですよ！

話しをするきっかけを作るには最高だよ！！

「うつひゃゝ！！楽しみだ！！」

いつもの帰り道、自然とスキップをしてしまう。

え？キモい？

・・・中学三年生、それは思春期のスタートラインなのだ。

ほとんどの中三は鼻の下が伸びっぱなしなんですよ。

いつでも奇跡を求める生物、中三。

夕日がもうすぐで沈む

辺り一面オレンジ色

閑静な住宅街の路地

「そう言えば・・・」

そう言えば、昨日のこの時間、この場所で俺はミィと出会ったんだっけ。

「……ま、今はそんな事より真理子さん！」

スキップ再開！

何かもう……楽しいです!!

その時……

「あ、何スキップしてんの？」

「は？」

後ろから声が。

調子に乗ってクルツと回転。

ずるっ！

こけた。

「何してんの？」

「あ、なんだ千姫か……」

俺は体制を立て直しながら確認。

俺の目の前には一人の少女。

若干茶色（地毛）の髪にクリクリした瞳、スッキリした顔立ちに

ポニーテール、スリムな体型、今は松山中の制服を着ている。

コイツの名前は越生千姫。千姫と書いてちひめと読む。

ぶつちやけお隣りさんで幼なじみ、このスパーオクテの俺が唯一、何の気も持たずに話ができる女子だ。

「何スキップなんかしてんの？いい事あった？」

「いい事どころじゃない、ハイパーな事だ」

「ハイパーな事？」

「YES、ハイパー」

「ふん」

あ、そう言えば千姫もカラオケ参加メンバーだっけ。

「そう言えば千姫、お前カラオケで何歌うの？」

「え？フツーに歌う」

「だから何を？」

「秘密！」

超ニコニコ顔の千姫。

コイツは若干天然。

「ねえ、信良は何歌うの？」

「俺？俺は……」

その時だった。

「川口信良発見！！これより捕獲に入ります！」

「……は！？」

どこからともなく聞こえた不気味な言葉。

その時、サッと俺達を囲む黒づくめの人間が現れた。
その数四人。

全員が黒いスーツ、黒いサングラス、黒い帽子。
大小様々な身長。

「何、誰？」

のんきな千姫。まずここは焦ろつよ。

「フハハハハ、我々は動物恋愛そ……じゃなかった、ブラック
クロウ団だ！川口信良をちょうだいするぜ！！」

一番のつばの男性が言った。

・・・正体分かった。

「・・・おい、何してんだお前ら」

「確保お!!」

俺の言葉無視

突然、黒ずくめの四人が俺に飛び掛かり、こめかみにグー。

「おふっ・・・」

たったの一撃で俺は暗闇の中へ・・・

「キサマ、これはなんだ」

目の前にはカラオケの採点機械。

「カラオケセットだ」

人間姿のポチ太郎が尻尾をふりながら答える。

「んな事は分かってる。何故、俺が拉致られ、気が付いたら事務所の中にいて、しかも目の前にはカラオケがある状況になっているのかを聞いているんだ」

「レッツカラオケ！」

「話を聞け、犬」

「まずは何を歌おうかな〜!!」

「おい犬」

「やっぱりアニソンからかな〜!!」

「・・・おい」

「よし、決めた！」

「・・・マイク取り上げるぞ」

「お袋さんにしよう」

「チョイスおかしくない!？」

いかん、ツツコミを入れてしまった。相手のペースにのまれたらアカン。

「お、いい、誰か他にいないのか？」

さっき、俺の目が覚めた時、俺は事務所のソファの上に横になっていた。

目の前にはカラオケを用意しているポチ太郎の姿のみ。
他のメンツの姿がない……

「おい犬、俺に何か用でもあるのか？」

無視

「……帰るか」

そして俺が事務所の扉を開けたその時、

「まあ待て」

事務所の奥から烏登場……頭には寝癖。寝てたなコイツ。

「お前を拉致ったのはほかでもない、今からカラオケの練習だ」

「……はい？」

焼鳥にして喰ってやるのか……

「お前、今度の日曜日はターゲットと一緒にカラオケだろ？」

「た、ターゲットって・・・」

「我々動物恋愛相談所はそれを全力で応援する。なにしろお前は俺らのお客だし」

「客になったつもりはないんだけど・・・」

「大丈夫、必ず成功させてみせる。さ、まずは歌の練習だ！」

「・・・・・・・・」

何なんだコイツら

「つーかブラック、あの時一緒にいた千姫はどうしたんだよ」

正体ばれたらマズイんだろ・・・

「あーそれは大丈夫、今フコンとミイが家に送っているはずだ」

「いや、そういう事じゃなくて・・・」

誘拐事件として警察にでも通報されたら・・・ややこしい事になる事間違いなし。

「だから大丈夫だ。俺らがお前の親せきだと言ったらすんなり信じた」

「なっ・・・・・・・・」

人のこめかみ殴って気絶させる親せきって……

っーか千姫それを信じたの!?

「さ、歌の練習だ。まずは何を歌うか？」

「えっ！マジでやるの!?!」

ガチャ！

「ただいま〜って、うわ……」

「あ?」

俺はソファーに横たわりながら事務所の玄関に目をやる。

……どつちやらミイ達が出てきたらしい。

「うわ〜すい……」

驚くミイ。

それもそのはず、今事務所の中はお菓子の残骸や大量の空きペックボトルが散乱中。

しかも、ソファーでは俺が伸びており、テーブルの上ではブラックがダウン中、ポチ太郎に至ってはお菓子の袋に埋まっている。

「な、何してたの？」

「……日曜日のリハーサル」

「うわっ！アンタ声、凄い事になってる！！」

「まあ、100曲近く歌ったからな……」

自分でも分かる、スーパーガラガラ声だ。

あゝ喉痛い……

「ま、とりあえずアンタがこの部屋掃除してくれるのよね？」

「……は！？」

「当たり前じゃん、アンタ達が散らかしたんでしょ？ならアンタ達の中で今、唯一意識のあるアンタが片付けるべきよ」

「え……お前、客に片付けさせる気か！？」

「いいからやる！！」

わっ……この猫耳人間爪立ててきた！！

「ちょ……分かったから」

このままでは引っ掻かれて失血死だ。

「ほれ、分かっただらさつさとやる!!」

「はあ……」

全く……喉痛いの……しかも俺、一応客なのに……。

「ほら、チンタラしてないでもっと動け!!」

「はいはい……」

ミイももつと大人しければ結構可愛いのに……。

「はあ……」

「ため息つかない!」

「すみません……」

そして日曜日・・・

「やつべえ〜!!寝坊した!!」

俺はチャリをこぎ、集合場所であるカラオケ店の駐輪場を目指す。

「だあ〜!!」

1月の終わり、辺りは当たり前のように寒い。

あ、今「辺り」と「当たり」をかけてみました!
え?つまらない?

つて、んな事はどうでもいいんだよ。

冷たい風が顔に当たる

空は快晴!

喉も治った!!

よし、MAXパワーでいざ、カラオケ店へ!!

第3話「川口信良捕獲大作戦」(後書き)

次回、カラオケ店で沢山のハプニング&アクシデントが・・・

第4話「カラオケで親交度UP大作戦（前編）」

「遅くなってゴメン!！」

俺がカラオケ店に到着した頃にはもう全員集まっていた。

「何してたんだよ、30分くらい待ったぞ」

こつこつするのはマイフレンドの日高幸也。

体育会系男子。

「わりい、ぶっちゃけ寝坊」

「ま、とりあえず、ここじゃ寒いから店ん中入ろっぜ!！」

ウーーン!

店の自動ドアが開き、店の中へ。

暖房あったけえ……的な事を考えていた俺は、その発見に

一瞬遅れた。

「いらっしゃいませ」

カウンターにいる店員の声を聞き、前を見る。

その瞬間、俺はフリーズした。

「ぶわあゝ!!」

「ど、どうした信良!？」

思わず奇声を上げてしまった・・・

「な、ななな・・・」

な、なんで・・・

人間に変化したミイがカウンターにいるんだ!!

「お客様、今日は何人で・・・?」

しかも店員・・・

「あ、7人」

秀勝が答える。

しかし、その時俺の意識はカラオケ店にはいなかった。

「どうしたの?」

千姫がフリーズしている俺の顔をじーっと見ている。

なんで・・・あのバケモノ猫がここに・・・

多分、アイツが今かぶっている店員制服の帽子の下には猫耳があるはず・・・

つか、アイツいつからここで働いているんだ?

「では、201番の部屋を使って下さい」

「おし、じゃあみんな行こうぜ」

「あ、秀勝待った、俺トイレしてからいくから、先に行つて」

「了解」

何とかみんなを先に部屋に行かせ、俺はカウンターへ。

「おい猫半獣」

「・・・お客様、私は猫半獣と言う名前ではありません。猫山ミカです」

「・・・ミイだろ」

「お客様、何を勘違いされて・・・」

「ふざけるな」

「・・・何よ」

ミイはプイッと横を向いた。

うわっ、ウゼー・・・

「何でお前がここにいるんだよ」

「何でって、バイトに決まってるじゃない」

「ば、バイト!?!?」

コイツ今何歳? (見た感じ高校生くらい)

「ほら、早く行きなさいよ、みんな待ってるわよバカ」

「なっ・・・」

うぐぐ・・・仕方ない、一旦部屋に行くか・・・

「いいか、くれぐれも俺らの邪魔するなよ」

「分かってるわよ」

何か怪しい・・・ま、とりあえずは部屋へ。

「おゝし、じゃあ次誰歌う？」

たった今幸也が歌い終わり、マイクをテーブルの上に置いた。

「じゃあアタシ歌う！！！」

そうやって今、マツハの速度でマイクを取ったのは新座葵、あんまり親しくない……

「なあ信良」

「ん？」

葵の歌がうるさすぎて誰の声かが分からない。

「お前暇なら飲み物持ってきて」

「飲み物？何の？」

「コーラでいいや」

そうやってグラスを差し出してきたのは孝明。スーパーインテリ君の異名を持つ天才。

「あ、じゃあ俺も」

幸也がグラスを差し出す。

「よろしく」

秀勝もグラスを差し出す。

「あ、あたしも！」

千姫もグラスを差し出す。

「今と昔、両方あるから人間ってやつわ」

歌いながらスツとグラスを差し出す葵。

「・・・わしゃ馬車馬かつ！」

チクシヨー！！

みんな自分勝手過ぎるだろ！！

・・・仕方ない、行ってくるか。

ガチャガチャ！！

うつ・・・グラス多すぎて一度に全部持てない・・・

「あ、川口君、私も一緒に行こうか？」

ななっ！！

「この透き通るような美声は・・・

「あ・・・」

もちっとした白い肌、可愛いらしい瞳、サラサラのロングヘア―

！！！

よ、よよよ寄居真理子さん！！

「グラス半分貸して」

その細く美しい手が俺の手元のグラスへ・・・

「あ、悪いな・・・」

やべ、俺声かつすかす・・・

「みんなコーラでいいよね？」

「おう」

「じゃ、行い」

これ、奇跡の展開だあ！！！！

一階、カウンター付近のドリンクバーの機械。

カウンターではミイが居眠りしている。
ありやすぐクビだな。

「あれ……?」

「どうした?」

この“どうした?”も声が出ずにかっすかす。

「コーラが出ない……」

「え?」

機械の故障か?

コーラのボタンを押しても、何も出てこない。

「じゃあさ、メロンソーダでもよくね?」

よし、今声かすれなかった。

「それがね、どのボタンを押しても何も出ないの」

「は?」

メロンソーダスイッチオン！！

無反応

ウーロン茶スイッチオン！！

無反応

オレنجージューススイッチオン！！

無反応

「私、店員呼んで来るね！」

真理子さんがカウンターへ・・・って

「ちよつと待った！」

真理子さんアカン、その居眠り店員アカン！！

「ん？どうしたの？」

「お、俺が聞いてきてやるから、少し待ってて」

「え？」

「いいから」

俺はカウンターへ。

「おい猫山さん」

「・・・うう・・・何・・・」

「寝てんなよ、猫山さん、ドリンクが出ないんだけど」

「ちょっと・・・待って・・・」

猫山　　もといミィは何故かカウンターの奥、従業員の部屋へ。

「つたく・・・」

あのバカ猫、尻尾まる見えなんだけど。
制服のスカートとシャツの間からよろっと・・・

数秒後

「はいはい、すみませんねえ」

「なっ・・・!!」

従業員の部屋から出てきた人物を見てビックリ!

「ドリンクバーの機械ですか?故障してんのは」

「・・・なんでアンタまで・・・」

制服のネームプレートには“烏森”の文字。

「おいコラ烏、テメエ何してんだ!!」

「いやはや、私は烏森黒夫だが」

「……………」

スルーしよう。

「あ、店員さん連れてきた？」

真理子さんにはバレてはいけない……

「お、ターゲット……じゃなかった、お客様、少々お待ち下さい」

ブラック……いや、烏森さんがドリンクバーの機械をいじくり出す。

「……お客様、申し訳ありません、機械がショートしたらしく……後ほどお部屋の方にドリンクの方をお運び致しますので」

「あ、そうですか」

「この烏めえく……!!」

「仕方ない……川口君、一旦部屋戻ろう」

「あ、ああ……」

「申し訳ありません」

その頃……

「ここか……」

俺らがいるカラオケ店の前、そこに五人の人間の姿が……
全員ベージュのコートで身を纏い、ベージュの帽子をかぶっている。

「ターゲットは……ブラッククロウソード、ミィ、ポチ太郎、
フコン、ジョニー山田……」

彼はニヤつと笑った。

「川口信良……」

五人全員が一斉に笑い出した。

「クハハハハ！もうすぐだ、もうすぐで……」

「お母さん、あれなに？」

「ゆー君、見てはいけません」

通行人に気味悪がれている事お構いなしに笑い続ける五人。

「今こそ、我々の時代の幕開けの時!!」

これから、前代未聞のくだらない事が始まる事を、この時の俺は
知らなかった・・・。

第5話「カラオケで親交度UP大作戦（後編）」

「あう〜・・・」

ヤバイ、マジで眠い・・・

「おいミイ、寝るな。さっさとカウンターに戻れ!!」

あゝ社長が帰って来た・・・

「まったく、俺が部屋にジュース持って行ってやったら信良の奴、知らん顔しながら“さっさと帰れ”だよ。腹立つな」

社長はお怒り気味のご様子。

最近の社長は愚痴ばかり。

この間だって、“国語って普通毎日あるだろ”とかずーっと言うてたし。

こっちだっているいる愚痴りたいつーの!!

「それよりミイ、さっさとカウンターに戻れ」

「・・・はあ」

仕方ない、カウンターに戻るか。

ウィーン!!

店の入口の自動ドアが開き、客が入って来た。

「いらっしやいませ〜・・・」

ヤバ、眠すぎて語尾がかすれた。

「あの、今日は五人何ですけど・・・」

う〜・・・客は五人・・・

「はい、当店の会員カードか何か持ってますか」

すると、五人の客は何やらこそこそと小話を開始。

「あ〜・・・」

数秒後、客の中の一人、中年のおばちゃんが懐から何かを取り出した。

スッ・・・

「動かないで」

小声で話し掛けてくるおばちゃん、その手元には一本の小刀。

は!?

「いい?今すぐここの客と店員をここに集めて」

何ぶつこいてんだこのババア!?

「は?何?あんたら・・・」

その時、おばちゃんが一瞬の内にカウンターを乗り越え、私の首もとに小刀を突き付ける。

「いいから従え!!」

おばちゃん絶叫、そして残りの四人が一斉にポケットから黒い何かを取り出した。

ん・・・なんだっけアレ?何かで見たことあるような・・・確かテレビで・・・

「うごくなあ」

パァン!!

うわっ!!客の中の一人、細っちい髭づら男が黒い何かから何か撃った!!

撃った何かは天井を直撃して、穴があいた・・・

微かに火薬の臭い。

あ、思い出した！あれ、確か拳銃ってやつだ！！

「動くなよ〜！」

細っちい髭づら男がニヤリと笑う。キモッ！

「キヤア〜！！！」

たまたま近くにいた他の客の一人が叫んだ。

「日だまりに照らされ輝き続ける僕らの命」

現在、秀勝が熱唱中。

次はいよいよ俺の番！

あの有名なラブソングで真理子さんを絶対に落とすぜ！！

「ねえ信良、何か焦げ臭くない？」

最初に異変に気付いたのは千姫。

「ん？そうか？」

くんくん、ん？何の臭いもしないが・・・

「うん・・・なんか花火の臭いがする」

「花火？・・・もしやあの半獣どもが何かしたんじゃない？」

「ん？どつしたの？」

「あ、いや、何でもない。ちよ、ちよっとトイレに行ってくるわ」

「いつてら〜！」

秀勝の歌がサビに入った！！早く行ってこないと俺の番が飛ばされる！！

「じゃ」

俺はいそいそと立ち上がり、部屋を出る。

「んのヤロー、また何かしたのか？」

数歩歩いて俺は気が付いた。

・・・カウンターの方から悲鳴が聞こえるんですけど。

よく耳を澄ませてみよう。

「キヤー誰か、誰か」

「助けて〜!!」

「ど、ドアが開かない……」

「止めて、撃たないで……」

「動くなあ〜!!」

パン!!

『キヤー!!』

……何か、凄く嫌な予感がするんですけど。
火薬臭いんですけど。

……悲鳴がすごいですけど。

「……部屋、帰るか……」

回れ右してUターン。

その時!

カチャっ!!

「動くな」

「ほへっ!!」

後頭部に何やら冷たい感触あり。

「振り返るな。両手を上げてカウンターへ行け」

・・・これ、ヤバイパターンかな？

「早くしろ。抵抗するなら撃つぞ」

「あゝ・・・ハイ」

これは完璧にヤバイパターンだね。
下手したら頭が吹っ飛ぶパターンだ。

「ほら、歩け」

・・・びびりしよ

俺、川口信良は考える

よくテレビや新聞で目にする銃乱射事件や立て籠もり事件などは、俺とは一切関係ない所で起こっているものだ、と、今までは考えていた。

そんな非日常的なものは俺の脳内にはなく、いざという時のシュミレーションなど頭にはこれっぽっちもなかった。

しかし今、俺はその事をとて後悔している。

もし、俺がテロ対策で少林寺拳法や空手を習得していたならば、きっと状況はこれほどまでには行かなかっただろう。

これほどまでには……………

「いいから早く詰める！！」

犯人グループ五人の一人が銃を俺に向けながら叫んだ。

最悪だよ…………

俺はしみじみそう思う。

…………今の状況を簡単に説明しよう。

カウンターではミイがだるそうに袋に金を詰めている。

ミイの首もとにはおばさんが持っている小刀。

そして、他の客は全員アイマスク、口にはガムテ、両手は後ろで縛られ中。

で、何故か俺だけはアイマスク、ガムテ無し。

しかし……ロビーのど真ん中で俯せ状態、しかも後頭部には拳銃。

アカンやろ、これ。

「いいか店員、テメエがちょっとでも反抗したら、コイツの頭が飛ぶぜ」

拳銃がぐいつと後頭部に押し付けられる。

「……別にソイツならいいし……」

ボソツと呟くミィ……っつーか何言ってるのこの猫!?

「……え?いいの」

は、犯人さん、ニヤニヤしないで……マジ怖い……。

「いいわよ別に。好きなだけ撃てば?」

ギャー!! 犯人さんを煽らないでえ!!

「……え、マジでいいの?本当に撃っちゃいますよ俺!??」

「どっぞ御自由に」

アカン!!

「……」

力チ！！

な、何！？今の音！

まさか・・・安全装置つてやつ、解除した！？

「へへ、いくぜ」

・・・アカン、俺死んだなコレ。

「うりゃー！！」

さようならみんな・・・・・・父さん母さん、悪いけど、先に天国に行ってるわ。

そして真理子さん・・・俺、ずっと君の事、愛しているから・・・

パァン！！

ヒュウ・・・！！

ズサツ！！

カキーン！！！！

スツ！！

「なっ・・・！！！！」

ズシヤッ！！！！

「……ん？」

な、何だ、今の効果音の嵐は……
あれ、つーか俺、生きてる!？

「起きろ信良」

この声……もしや

俺は0.01秒で起き上がり、その場で振り返る。

そこには……見覚えのある鳥と猫がいた。

「なっ……」

俺、絶句。

二匹の足元には、犯人のおばさんと、俺に銃を突き付けていた細身の髭づら男が俯せで倒れている。

「あんたらが……倒したのか？」

俺は恐る恐る質問。

「ああ。俺らが倒した。ま、他の客が全員アイマスクしてたから変化出来たが、もしアイマスクをしていなかったら……今頃お前は……」

「恐ろしい事小声で言うな!!」

「……しかも、さらにまずいのは……」

「ま、まずいのは？」

ブラックは腕を組んだ。

「この二人は人間だが……残りの三人は多分、半獣だ」

「は、半獣！？」

それ、やばくない！？

「さっき監視カメラで確認したんだが……三人には尻尾らしき物が」

「……」

俺、絶句。

「仕方ない、おいミイ！！」

「ん？」

「事務所へ連絡、フコンとポチ太郎をこっちに呼んでくれ。山田にはこっちからカメラの映像を送るから、解析を頼んでくれ」

「分かった」

ミイはポケットから携帯を取り出し、電話を掛けた。

「よし、じゃあ信良、俺らは先に寄居救出にでも行くか」

「は!?!」

何言ってるんだ!?!

「ほら、かつこよく寄居を助ければ、モテるぞ」

「今、そう言う問題じゃないだろ!?!つか人間が半獣に勝てるか普通!?!」

「バカヤロー、せつかくのチャンスなんだ。いいところ見せなくてどうする」

「無理でしょ!?!」

さすがに今はコメディーパーツじゃねえよ、シリアス的なバトルパートだろこの状況は!?!

「大丈夫だよ。多分」

「多分ん!?!」

「ほら、行くぞ」

「え、マジで行くの!?!え!?!」

ヤバイんじゃない?この状況!?!

第5話「カラオケで親交度UP大作戦（後編）」（後書き）

今回はちょっと内容や設定をはしより過ぎちゃった気が……。何かよく分からない事があつたらどんどん質問して来ちゃって下さい。ちゃんと答えますから。

次回、事件の全貌が明らかに！！

第6話「寄居真理子さん大救出作戦」

「急げ、早くしないと・・・」

「わ、分かってる」

俺は鳥に変化しているブラックと共にカラオケ店内を疾走中！

早く皆の所へ行かないと・・・半獣が・・・

「はあはあはあ」

ああ・・・階段キツイ・・・

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「なんだ？もうばてたのかもやしっ子」

「はあ・・・誰が・・・もやしっ子・・・だあ・・・はあ」

うう・・・さっきの緊張のせいかな、足が震えて上手く走れない・・・

「信良、ツッコミにキレがないぞ」

「うるさい黙れ・・・はあ」

ヤバイ・・・酸欠。

「・・・っ！！信良、一旦ストップ」

「は？」

「・・・誰がいる」

その時、誰かの靴音が・・・
コツッコツッコツッコツ

「・・・え？」

な・・・もしかして生存者！？

そして、それは目の前のかどから現れた。

コツッコツッコツ

「・・・あ」

そこに現れたのは、若い男性。

「あの、もしかして生存者の方・・・ですか？」

結構なイケメン・・・180センチはあるであろう身長、長い足
頭には黒いニットぼう。

「あなた・・・誰？」

「あ、俺、川口って言います。こっちは・・・さっき店内に迷い

込んできた野生の鳥です」

「カア!!!」

おおっ！ブラックが乗ってくれた!!

「川口……」

「あ、はい。川口信良です……。あの、今ここ凄く危ないんで、早く逃げた方が……」

ヒュっ!!!

「信良ふせる!!!」

ぐいっ!

「うわっ!!!」

その時、俺の頭上を何かが横切った。

スー……

俺は勢い余って地面に倒れた。痛い……

「チっ……」

「な、何!？」

え!!!若い男性の手元には……銀色の……長細い何かが二本。

「・・・次で仕留める・・・」

男性は二本の何か・・・ってアレ、まさか日本刀!?
男性は二本の日本刀を構え、ギロリと俺を睨む。

こ、怖い・・・

「・・・そう言えば、まだ名乗ってなかったな」

は!? 何武士みたいな事言っって・・・

「俺は川越豹太、じゃ、いくぜ」

「え!! ちよつ、まつ、え〜!!」

素人でも分かる、明らかな殺気・・・

「え、何なん!!」

次の瞬間、豹太の日本刀が俺の首を捉えた。
ほんの一瞬、かなり速い斬撃、目に見えなかった・・・

「うわっ!!」

「首取った」

その時!!

ガキーン!!

「え．．．!?」

「な．．．!?」

俺の目の前には、綺麗に真っ二つになった灰皿

「いや〜危ない危ない．．．」

「あ．．．」

俺の後ろ、そこには数枚の灰皿を持った人間姿のブラックが．．．

「俺が灰皿投げてなかったら今頃アンタ死んでたかもな、信良」

「ブラック．．．」

ブラックはニヤリと笑う。

「よう豹太、相変わらずだな」

「烏森黒夫．．．厄介な奴がいたもんだ」

「へ．．．?」

何?この久しぶりの再開的な雰囲気は?

「信良い!」

「え!?!」

「コイツは俺に任せろ、アンタはさつさと寄居ん所行きな」

「はい!？」

なんだこの状況!？

「コイツ・・・川越豹太は半獣だ」

「・・・え!？」

な、なんですとお〜!

「さつさと行け、もやしっ子」

「だ、誰がもやしっ子だ!！」

そうツッコみつつ、俺はダッシュ!!

「行かせはしない」

豹太は直ぐさま反応、一気に俺に斬り掛かるが・・・

その時、豹太のニットぼうがずり落ち、黒い髪が見えた。

そして、頭部からはミイみたいな猫耳・・・いや、豹耳が二つ・・・。

「あ・・・」

しめた、豹太がニットぼうに気を取られている僅かな隙に、俺は

一気に豹太の横を突っ切った。

「ちっ……」

豹太は直ぐさま俺を追う体制に入ったが、豹太と俺の間にブラックが入り込んだ。

「行かせはしないぜ、豹太」

「烏森……」

「NO、今は烏森黒夫じゃない、ブラッククロウソードだ」

「……中二か、そのネーミングセンス」

少しの静寂……

「……豹太、お前の目的はなんだ？」

「……」

「まさか、まだあの会社に所属してんのか？」

「……」

「やめとけ、あんな場所。今ならウチで雇ってやってもいいぜ、豹太」

「……」

「第一、あんな後ろじみた場所よく・・・」

「・・・」

「シャキッ!!」

「日本刀をひと振り。」

「・・・危ねえな」

「・・・俺は動物戦闘屋の一員、川越豹太。上からの命令だ、あんたら動物恋愛相談所の一味を抹殺する」

「なっ・・・」

「いくぜ、構えろ!!」

「ブラック、大丈夫かなあ〜?」

俺は走りながら思った。

「つか、何かすごい事件に巻き込まれた気がする・・・」

そして、しばらくして俺らがいた部屋、201号室に到着した。

「……くっ」

唾を飲み込み、ドアのところに手を掛ける。

深呼吸よし、いざ、オープン!!

ガチャー!!

「……っ」

そこには……誰もいなかった。

「……遅かった」

ヤベー!!…どうしよう……真理子さん!!

真理子さんだけじゃないし、秀勝に幸也、孝明に千姫、新座……

「あ……どうしよう」

ま、まさか半獣に喰われたとか……

「……ちやほちやほ……」

「そうですね、ヤバイですこと」

「ああ、やばいよ……ん!？」

振り返る。クルツ。

「……誰？」

目の前には、スーツをきた太いオバハンの姿ありけり。

赤い三角ふち眼鏡を掛けて、髪はオダンゴ、いかにも語尾に“ザマス”って言いそうなオバハンの姿ありけり。

「何で容姿の感想が古文風になってるザマスか!？ありけりって何ザマスか!？」

ザマス言った……つーか人の心読めんのコイツ!？

「ゴホン、わたくし、動物戦闘屋の秩父蜂乃と申します」

丁寧に名刺を差し出す秩父さん。

「あ、どーも……ん？動物戦闘屋？」

その時、突然目の前に蜂が!!

「うわっ!!」

何とか追い払う、あれ?この時期に蜂って……ってうわっ!!

「気付くの遅いザマスねえ、信良ちゃん!」

気付くの遅かった……

俺が気付いた時、この201号室の中に……大量のでかい蜂が所狭しと羽ばたいていた。

「え！？何これ!？」

いつの間に……ってか蜂居すぎでしょコレ!？

「わたくしは動物戦闘屋。今回のターゲットは貴方ザマス」

「……俺？」

脳内パンク寸前。

何がどうなってんのコレ!？

「そうザマス。今からわたくしの部下であるこの蜂ちゃん達が、信良ちゃんの命を奪うザマス!！」

蜂……部下……

「……まさか」

「ふふっ、わたくしは蜂半獣、女王蜂ザマス!」

やっぱり……

「ささ、蜂ちゃん達、信良ちゃんの命を奪うザマスよ!！」

「なっ！！ちょっとタンマ！！ってか何で俺がターゲットなんだよー！！」

なんか怨まれるような事したっけ・・・否、していない！！

「行け、蜂ちゃん！」

ブーン！！

大量の蜂が俺目掛けて突っ込んで来た！！

真理子さんのデートの夢、ここで散った・・・

その時だった！！

「息止める信良！！」

プシュー・・・！！

「なっ・・・！？」

「何ザマス！？」

室内に白いガス状の気体が、部屋の入口から放たれた。

「う・・・」

な……この独特の臭い……まさか殺虫剤!?

「なあ……ヤバイ……ザマス……」

辺りの蜂が力無く床に落ちていく。

そして秩父も……

「大丈夫? 信良?」

俺は殺虫剤でしょぼついた目を擦り、部屋の入口、声のした方に目をやった。

そこには……

「お前らか……」

「なんだその顔!! せっかく来てやったのに」

「全くだわ!!」

ポチ太郎とミイの姿がそこにあった。

第6話「寄居真理子さん大救出作戦」(後書き)

次回、カラオケ編佳境突入!!!
もはやカラオケではないが……

信良は真理子を救えるのかっ!?

第7話「発電室へ強行突破大作戦」

「ミイ、ポチ太郎、遅すぎ」

俺は目を擦りながら言う。

「なんだよ、もしオイラ達が来てなかったらお前死んでたんだぞ
！！」

相変わらず元気がいいポチ太郎。

「そうよ、カモないくせに偉そうに！！」

ミイはいつもと変わらずツンツンしてるし。

「かつて……てかお前ら」

俺はポチ太郎が持っている殺虫剤をちら見。

「よく相手が虫だって分かったな」

「ああ、それなら、山田が教えてくれたのよ」

「山田って、あのクリオネ幼児の！？」

「そう、社長が店内の監視カメラの画像を送って山田が解析、その結果、三匹の半獣の中に豹と蜂がいるって事が分かったのよ」

「じゃあ、あと一匹は!？」

「それが、何か映りが悪くて解析できないんだってさ」
「なんだそれ!？」

「うう・・・」

「やべ、秩父が目を覚ました!!」

「よくも・・・わたくしの可愛い蜂ちゃん達を・・・」

「ポチ太郎、殺虫剤よ」

「あゝい」

「プシュ〜!!」

「ぐあああああああああ!!」

顔面に噴射。容赦ねえなコイツら。

「信良、寄居やその他まだ未発見の客は全員発電室にいるって山田が言ってたわ」

「そんな事まで分かるのかよ!!」

「早くいきな。ここはあたし達で何とかしておくから」

「わ、分かった」

俺は発電室の場所をミィから教わり、部屋を後にする。
そしてダツシュ!!

「真理子さん……」

早くしないと……まだ半獣は一人残っているわけだし……

とにかくダツシュだ!

「前より動きが遅くなっているぞ、烏森」

「うるせー」

豹太は両手に日本刀を構え、立て膝をついているブラックの前に立っていた。

「……っは!!」

豹太は一気に跳躍、右手の日本刀を水平にし、ブラックの脇腹目掛けて横に斬撃を入れる。

「くそっ!!」

ブラックは直ぐさま後躍し、斬撃をかわす。

しかし、豹太はそこから一步踏み込み、左手の日本刀で追撃。

「くっ・・・」

ブラックはすぐに受け身の体制へ。両腕を顔の前で組み、斬撃を腕で受け止める。

ブシュッ!!

ブラックの腕から血が滴り落ちた。

「・・・どうした、その程度か？」

「はあく、やりにくいなあ」

ブラックは一瞬で鳥の姿に変化。

「・・・なあ鳥森」

「ん？」

豹太は相変わらず隙を見せない。

両手には構えたままの日本刀。

「お前、もう一度こっちで働かないか？」

「あ!？」

驚くブラック。

「別にいいだろ？条件は悪くない。また昔みたいに派手に殺し合
いしないか？」

「……」

しばらくの沈黙。

「……無理だな」

「何故？」

「確かに、昔は人間の殺意ってやつに興味があったから戦闘屋に
入っていたんだ。だが、今は人間の恋心ってやつに興味があるんだ。
戦闘屋じゃ、恋の悩みなんて皆無だろ？」

ヒュッ!!

豹太は右足を軸に回転、かなりの速さで斬撃を仕掛けた。

しかし、ブラックは一気にその場で上昇。斬撃をかわす。

「……やはり、お前の俊敏性はすごい。この俺の斬撃をこつも
簡単にかわす奴など、他にはいない」

「簡単じゃないよ。かなりタイミングはシビアだし」

「・・・フツ、じゃあ俺もそろそろ本気で行くか・・・」

そう言うと豹太は二本の日本刀を投げ捨て、両腕を床に付けた。
そして・・・

「変化」

豹太は人間の姿から豹の姿に変化した。

「いくぜ烏森、氣い抜くなよ」

「・・・来な」

次の瞬間、豹太はブラック目掛け飛び掛かった。

「ここか・・・」

俺は何とか発電室に到着。

「……行くしかないよな……」

辺りはあまりにも静かすぎ。
何か不気味だなあ。

「……………」

改めて考える。
怖ええ〜……

無音つて、何か恐怖倍増させる気が……

「見つけた……」

「うわっ!!」

突然の声にスーパービツクリ!!

軽く跳びはねてしまった……。

「……大丈夫ですか？」

声は後ろから聞こえる。

さあ、勇気を持って振り返る、俺!!
くるっ!!

そして、そこにいたのは……

「な、なんだ……フコンか……ん？」

「どうしました？」

そこにいたのは明らかフコン。
しかし……

「……なあフコン、その首に掛けてあるやつってまさか……」

コンバットヘルメットをかぶり、背中には大きなリュック、手には双眼鏡、そして首には黒い……

「これですか？これ、マシンガンです」

「なっ……」

お前は自衛隊かっ！！

「あ、ちょっと待ってて下さい」

その場でリュックをおろし、中をがざり「そあそるフコン」。
そして……

「はい！」

「……これって」

渡されたのはカンパン、ペットボトルの水、ヘルメット、防弾の
チヨッキ、そして、これは多分ハンドガン……

「さ、もうすぐ突入しますよ」

「……マジで？」

これは……銃刀法に違反するんじゃないですか

「くれぐれも、一般人には撃たないで下さいね」

「んな事、分かってるわっ!!」

ここに来て、何かテンションが上がってきた俺。
今なら行ける気がする!!

「……行きますよ」

「お、おう!!」

次の瞬間!!

ポイツ!

フコンが何かを投げた……なんだアレ?

ドカッン!!

「ぶはっ!!」

ば、爆発した!!

凄い爆風……そして、発電室の扉が吹っ飛んでるし……

「フコン……今、なにを……」

「え？手榴弾を投げました」

「そ、そんな物まで……」

恐ろしい……

「さ、行きますよ」

超高速で発電室に突入して行ったフコン。
アイツ……何者なんだ……

「うわ……」

俺が発電室に入って最初に見たものは……床に俯せで倒れている大量の人間の姿。

「な……まさか……死んでる？」

変な異臭はしない、血痕などもない。

「……………」

フコンは近くで倒れている人の腕を持ち、脈を計測中。

「死んでは……いないみたいです」

「そうか……」

ホツとした……って違う!!

真理子さん達を探さないと!!

「み、みんな?!? いるう?」

発電室に響く俺の声。

「うう……」

不気味だ……物音一つしない。

その時

「誰だキサマ!!」

「……………?!?」

俺は部屋の入口の方に目を向ける。

そこには……見た事もない大男が立っていた。

「え……あの……その……」

誰だろ・・・？

「キサマ・・・もしかして川口のぶ・・・」

大男が何か言いかけたその時！！

ダダダダダダダダダダダダダダ！！！！！！

「あ・・・NOオ~~~~！！」

フコンが大男に向かいマシンガン発射！！

辺りに響く銃声、火薬の臭い・・・

「アカ〜ン！！」

脳内パニックin俺。

この狐、人にマシンガンぶっ放しやがった！！
しかも涼しい顔しながら撃ってるし・・・

「ふう・・・」

結局、弾切れになるまで撃ちまくり。

「あ・・・ああ・・・ああ・・・！！」

やっちまった。

「やりましたかね？」

「やりましたかね？じゃねーよ、完全に殺っちまったよ、コレ！
」

しかもさらに怖いのは・・・フコンの顔に一滴、血が付いている
事・・・

右頬に一滴、紅いのがぴちゃっと・・・

「どーすんだよ、もう前科持ち決定だよ！！」

「大丈夫です。マシンガンと一緒にスコップも持ってきましたか
」

「隠蔽する気！？」

恐ろしや、動物恋愛相談所・・・

「あゝいたい・・・」

「へっ！？」

あれ、今、大男の声が・・・

「キサマ、不意打ちとは・・・卑怯なり！！」

「なっ・・・」

今・・・俺の目の前には全員血まみれの・・・大男の姿が！！

「なんで……さつき……マシンガンで……!?!」

男はぴんぴんしている!!

「やはり……」

フコンは相変わらずマシンガンを構えたまま。

「え、やはりって……!?!」

「あの男は半獣です」

「えっ……」

男は筋肉質のがたいのよい体、濃い顔、角刈りの頭。

「ほう、やはりキサマ、川口信良だな」

男は腕を組んだ。

「我は所沢鮫介、動物戦闘屋社長なり!!」

「じゃ、社長お!?!」

社長つて事は……めちやくちや強いパターンですな、これ。

「川口信良、依頼主からの命だ。キサマの命、我が貰う!!」

「い、依頼主!?!」

誰かが俺を殺そうとしている・・・
やべえ、なんか・・・

「覚悟お!!！」

所沢は右拳を握り、俺目掛けて走り出した。

「・・・っ!!！」

ヤバイ、恐怖と所沢の威圧で足が動かない!!！」

しかし、俺はそんな極限状態の中で、また違う事を考えていた。

誰かが・・・俺を殺そうとしている・・・誰が・・・なんで・・・

何か泣きたくなってきた。

「うおおおおおおおおお!!！」

ハッと気付いた時には、所沢の拳はもう俺の目の前にあった。

しまった・・・

「首、貰った」

ジ・エンドオブ・俺

「呪縛“蒼鬼火”」

もうだめだと思い、目をつぶった俺、しかし、いつになっても攻撃がこない……

「……あ？」

俺は恐る恐る目を開ける。

そこには……

「なぬ、キサマ、半獣か……」

「……はい」

「えっ!？」

俺のすぐ目の前、そこには所沢の姿があった。
しかし・・・所沢は殴り掛かるようなポーズをしたまま、ピタリと動かない・・・。

さらに、所沢の周りには蒼い炎みたいなものがぐるぐると渦巻き、部屋を蒼く照らしている。

「ひ、人魂!?!」

もしかして・・・ここ、天国だったりして。

「川口さん、早くその場から離れて下さい」

「え?」

俺から数メートル先に、狐の姿に変化したフコンの姿があった。

「もうすぐ術が解けます。早くしないと殴られますよ?」

術?

と、とりあえず所沢の前から離れよう。

数秒後

「ぬおっ!?!」

所沢は突然動き出し、その拳はさっきまで俺がいた床を激しく殴りつけた。

ど〜ん!!

床のタイルは木っ端みじんに・・・

「ぬぬ・・・キサマ、ただの狐ではないな？」

所沢の問いに、フコンはコクリと頷く。

「私は狐火山の白狐。白狐半獣のフコン」

「狐火山・・・なるほどな」

「・・・・・・・・？」

人間の俺にはさっぱり分からない。

「狐火山・・・それは京都は山奥にある“白狐”を奉る神聖な山」

フコンが空気を読んで説明を始めた。

「“白狐”とは、神通力をもつ神の使い。世間的には伝説の生き物で、実際には存在しない生き物だと思われています」

「なっ・・・・・・・・」

現実感ねえ・・・・・・・・

「本当はジャンルがコメディーのこの小説で、こんなファンタジーな事、したくないんですが・・・」

「うん、分かったからフコン、世界観ぶち壊すな」

白狐ねえ・・・さっきの人魂も神通力なのかな？

「フハハハハ、中々面白いではないか」

あ、所沢の事忘れてた・・・

「今回の依頼は川口信良と、その周辺の半獣、つまりは動物恋愛相談所の奴らの抹殺。初めはつまらんと思っていたが、まさかこんなにレアな奴がいたとは・・・楽しくなってきた」

「・・・・・・・・」

依頼主は俺が動物恋愛相談所と関わりがある事を知っている・・・！？

「まあよい、我は鮫半獣、陸であるここでは変化できん。が、半変化ならできる」

「半変化？」

所沢はかるく深呼吸をすると、目をつぶった。

そして、背中から何やらヒレが生え、皮膚は鮫肌みたいにざらざらになり、口からは鋭い歯が！！

「半変化、それは人間と獣の姿に変化する事。獣の力と人間の力を受け継ぐ代わりに、ものすごく体力を消費するため、長くは持続出来ない」

フコンが説明してくれた。なんか・・・物分かりがいいな。

「行くぞ！我の力、見るといい」

目つき怖っ・・・

俺はさっきフコンから渡されたハンドガンを構える。

そう言えばアイツ、さっきマシンガンを喰らってもへっちゃらだ
ったんだよな・・・
さすが鮫肌。

でも、俺には今、武器はこのハンドガンしかないわけだし・・・

「鮫肌アタック！！」

うわっ！所沢が全身を使ってタックルを仕掛けてきた。

「くそっ！！」

一か八か、川口信良初射撃、いつきまーす！！

第7話「発電室へ強行突破大作戦」(後書き)

次回、信良&白狐VS鯨、烏VS豹、犬&猫VS蜂、各戦決着!!

最終話「終わりとそれから、そして始まり」

ぱあん、つと俺の撃った弾は空気を斬り裂きながら進み、所沢の鼻辺りに直撃した。

グサツ

「ぐあああああああああ！！！」

「うおっ！！！」

所沢は地面に倒れ、のたうち回っている。

「え・・・なんで？」

マシンガン喰らってへっちらだつた奴がハンドガン喰らって大ダメージって・・・

「鮫の弱点は鼻なんです。やりましたね、川口さん！」

「なっ・・・」

た、確かに聞いた事はあるが・・・
所沢は地面に倒れたままピクリとも動かない。

「勝ちましたね」

「あ、ああ・・・」

なんか・・・いいのかなこんな勝ち方？

「それより川口さん、お友達の方は？」

「あ、そうだー!!」

俺は辺りを見渡す。

そして・・・

「・・・っあー!!」

あ、あそこに倒れているのは・・・

「孝明に幸也、千姫に新座!!」

そして・・・

「真理子さん・・・」

俺は倒れている人を踏まないように、しかし走りながらみんなの元へ。

「みんなっ!!」

俺は叫ぶ。

俺の前方にはみんなが倒れている・・・

「おい、みんなー!!」

俺は走る、そして叫ぶ。

しかし、みんな倒れているだけでピクリとも動かない。

「死んでは・・・ないよな」

少しの不安。

みんな無事なのか？

そして、みんなまであと数歩のところまできた。

その時・・・

「川口さん、危ないっ!!」

フコンの声がした。

そして・・・

パン！！

「・・・えっ？」

銃声、火薬の臭い。

そして衝撃。

俺は軽く吹っ飛び、壁に衝突。

ガコーンと頭を打った・・・。

そして、左腕に鋭い痛みが走った。

「うっ!?!?、・・・うっ・・・」

声が出ないほどの痛み。左腕を見ると、ドクドクと溢れる紅い液体。

焼けるような痛み、体からは嫌な汗が。

「川口さんっ」

フコンがこっちに寄ってくる。

「うう……」

「大丈夫ですか？すごい出血ですよ!？」

その時

「ハハハ、ぶざまだな、信良」

聞いた事のある声、そして、発電室の入口に人の影が。

「信良、痛いか？痛いだろうな。何しろ拳銃で撃たれたんだからな」

入口にうつる影、その影の主がこの部屋に、ゆっくりと入ってくる。

「本当は心臓を狙おうとしたんだが、少しズレたか……」

「お、お前……」

俺はそいつの顔を見て、絶句した。

「それにしても戦闘屋の奴らは何をしてんのだか。全く依頼が達成できていないし」

「・・・な、何でだ・・・」

俺は驚きのあまり、動く事が出来ない。

「ま、半獣に頼った俺が馬鹿だっただけかも。な？信良」

そう言っただけで、深谷秀勝は微笑んだ。

「秀勝・・・お前・・・何で・・・」

「簡単だよ。俺はお前を殺したい」

・・・時間が、止まったように感じた。

「何で・・・」

数秒の沈黙の後、俺は尋ねた。秀勝に。

「・・・邪魔なんだよ、お前が」

「じゃ、邪魔って・・・」

理解が出来ない。

大親友だと思っていた秀勝が、俺を殺したがつている・・・

「・・・ふん、分かった。お前に分かるように、単刀直入に言うてやる」

俺は秀勝を見た。

「俺は・・・寄居真理子の事が・・・好きなんだ」

「はあ!？」

思わずマヌケな声を出してしまった・・・

「・・・ハハハ、やっぱりそう思うよな、コイツ何言ってんだ! ?」

秀勝は笑いながら俺に銃を向けた。

「お前も、寄居の事が好きなんだろ？」

「えっ!？」

「それくらい分かるさ。お前はいつつも寄居の事を見ていた。いつつも寄居の事を思っていた」

「・・・」

左腕の傷口がジワリと痛んだ。

「なあ、知ってるか？寄居の奴、好きな男子がいるんだってよ」

「……………」

「……………ハハハ、お前だってよ。川口信良」

「えっ……………!？」

まさかの展開だ。

「俺、冬休み開けのある日、寄居に告ったんだ。そしたら、ゴメン、と。お前の方がいいんだ、と」

「……………」

マジでか？

「俺は……………初めは諦めようと思った。仕方ない事だと。けど、時間が経つに連れて何か、イライラと言うか、ムカムカと言うか、そんな感情がしてきた。あんな間抜けでオクテで地味な奴のどこがいいんだと。俺はあんな奴に負けたんだと」

「え……………」

そんな風に思われてたんだ、俺……………

「でさ、悪いとは思ったけど、ある日、下校するお前をつけてみる事にしたんだ。寄居はお前のどこに惚れたのか知りたくて」

「……で？」

「そしたら、お前突然猫と話しだして……猫が人間になって……そして、半獣の事と動物恋愛相談所の事を知った」

「……あの日か」

ミイと初めて出会い、ブラックやフコンと初めて出会ったあの日。

「で、俺は思った。このままじゃ、信良と寄居がくつついちゃう。両思いだって事を知ってしまう。俺はそれが気に入らなかつた」

「それで……まさか……」

カチャ！

秀勝は銃の安全装置を外した。

「大変だったんだぜ、普通の一般中学生が殺し屋を捜すの。そして、見事半獣絡みの戦闘屋を見つけた。半獣には半獣がピッタリだと思つてな」

「秀勝、お前……」

「信良が死ねば、寄居とくつつく事は無くなる。そしたら、俺は頑張つて寄居に好きと思われるようになると思つ」

秀勝は急に真顔になった。

「最後だから教えてやる。この事件を動物戦闘屋に依頼したのは

俺だ。川口信良とそれに関係がある半獣の殺害。依頼料はカラオケ店から奪えばいい。だから、俺はお前をカラオケに誘ったんだ」

「そんな・・・」

人を思ふ心は恐ろしい

確か前にテレビか何かで言ってたな・・・

人を思ふあまりに、人は過ちを犯してしまう事がある。間違った道に進んでしまう事がある。

理性の崩壊・・・だったっけ？

秀勝は今、その過ちを犯してしまっている途中なんだ・・・

「じゃあな、信良」

「川口さん!!」

フコンが叫んでいる。

けど、俺の意識がそれに応えようとしていない。

「・・・っ!!」

フコンは俺達の前に結界を出した。

「川口さん、早く逃げて下さい！私の能力は人間の作った兵器に對して効果が薄いんです!!」

俺は動かない。

ショックのせいで放心状態。

「川口さんっ!!」

パン!!

秀勝が銃を撃った。

ガキーン!!

弾は結界に直撃。たった一発で結界にヒビが入った。

「うっ・・・」

フコンは少し苦しそうな表情。

「川口さん、早くっ」

パン!!

二発目の弾は結界を割った。

パンっ!!

「か、川口さん・・・」

俺の目の前にはフラフラの白狐。

どうやら術が強引に解かれると大ダメージを受けるらしい。

「さよなら」

秀勝は笑った。

その時だった。

グサツ！！

「つぎや〜！！」

左腕の傷口に馬鹿でかい痛みが走った。

「信良、何アンタボサツとしてんのよ!？」

「えっ!？」

突然、声がした。

俺の足元から、聞き覚えのある、女性の声。

「全く、ぜんぜんなつてない」

俺は足元に目をやる。

そこには、猫がいた。

とら柄の、猫だった。

「み、ミイか？」

「何か質問ある？」

「いえ……」

「つか、何でミイがここに……」

「ミイ、お前あの蜂オバハンは？」

「蜂？ああ、今ポチ太郎がチェーンでぐるぐる巻きにしてると思
う」

「あ、ああ……」

「それより信良、アンタ友達を助けてあげないの!？」

「え、えっ？」

「深谷秀勝、はやく彼を止めなさいよ!！」

「なっ!？」

「……多分だけど、秀勝はフラれたせいで心が不安定なだけな
んだと思う。だったらアンタがその不安定を安定にしてあげなさい
よ。友達なんですよ？」

「そ、そんな……」

「同じ寄居真理子を好きな者同士、バーンと言ってこい!！」

ぐいっ!!

「うわっ、分かったから押すな!！」

俺は軽く深呼吸。

「……話は終わったか信良？じゃ、いくぜ」

秀勝は俺に銃を向ける。

「おい、ひ、秀勝」

情けない事に声が震えている。

「お、お前はそれでいいのか？」

「はあ？何が？」

「お前は……た、ただ負けるのが怖くて逃げているだけだろ！？」

「……ふん、何を言うかと思ったら」

「お前は……逃げてるだけだ！俺に真理子を取られたくないからって」

「……死ね」

パン！！

銃弾は俺の右頬をかすった。

直撃はしていない。しかし、血は出てきた。

痛い、怖い、けど……

「だってそうだろ？お前はさっき、俺を殺して真理子さんに好きになってもらいたいって言った。つまり、まだお前、真理子さんの事、好きなんだろ？」

「……………」

「だったらさ、俺に負けるなよ、お前にとって俺は間抜けでオクテで地味少年なんだろ？だったらそんな俺に負けんなよ、もう一度頑張つて、真理子さんに振り向いてもらえよ！」

「…………何を今さら」

「今さらじゃなくて、頑張つてみるよ！確かに俺も真理子さんの事、好きだ。だから、俺と勝負しよう！先に真理子さんに振り向いてもらった方の勝ち」

「フツ……寄居はお前の事が好きなんだぜ。俺なんか……」

その時、俺の頭の中で何かが切れた。

そして、はじけた。

「甘ったれた事言っでんじゃねーよ、ガキ！！」

「なっ……………」

「てめえはすぐ諦めんのか？好きな奴の事、すぐ諦めんのか？つたく、馬鹿みてえな甘ちゃんだな」

「信良……………」

「てめえ、まだ真理子の事が好きなら、俺から奪いとってみろよ。殺人とか戦鬪屋とかじゃなくて、その気持ちで奪いとってみろよ！」

「……!!」

「言っとくけど、俺が真理子を好きだって気持ちはバカデケエぜ。それでも真理子の事が好きならかかってこい、そして真理子の心動かして、俺から奪いとってみろ」

「って、俺、何言ってるんだあゝ!!」

「ヤバイ！撃たれるかも……」

「……俺は寄居の事が好きだ。お前には負けない……」

「え、あ……ああ」

「……その勝負、受けてたつ、信良」

「……ああ」

そして秀勝はガシャン、と、その場で銃を落とした。そして、その場へなつと腰をおろした。

「……彼の目には、キラキラと光るものがあった。

「……みんなに、悪い事しちゃったな、俺」

「秀勝……」

「ゴメン、信良」

「……………」

俺はこの時、何て言ったらいいのかわからなかった。

それから数分後、カラオケ店には沢山の警察がやってきた。

そして、秀勝は自首。警察に事情を話し、警察署へ連行。

その他に人間の犯人二人が逮捕されたが、豹太、蜂乃、鮫介は何がどうなってるのか、逮捕はされなかった……っ！か、知らぬ間にいなくなっていた。

ちなみに、監視カメラ等の映像は間違っって山田が削除してしまい、無くなってしまうた。

そして人質。

ロビーで拘束されていた人達は皆、無事だった。

そして発電室にいた皆も無事だった。

後から千姫に聞いた話だと、俺がトイレに行くと言って部屋を出た直後、部屋のドアがノックされ、開けてみた所、突然意識を失ったと言う。

警察の検診の結果、千姫達は睡眠ガスを喰らっていたのだそうだが人には無害のガス。

恐らく、犯人の仕業。

そして、この事件はカラオケ店を狙った金目当ての犯行だったとマスコミは伝えた。

犯人に15歳の少年がいた事は報道されたが、それが秀勝だと言う事は報道されなかった。

そのため、千姫達やクラスの奴らは今、秀勝は遠くの病院で事件の時に受けたであろう傷を治療していると思っ込んでいます。

そして、この事件は死亡者0だった事から、あまり大きく報道されず、すぐに社会の情報の波に埋もれていった。

そして俺は警察がくる前に、フコンの力で傷を治し、犯人からの被害0を装った。

かくして、このカラオケ事件は幕をおろした。

「ふは〜・・・長かったあ〜」

事件についての警察からの事情聴衆を終え、俺は一旦、家に帰宅。両親と軽く会話をしたのち、今度は事務所へ。

「よっ！・・・ってうわっ！！」

俺が事務所に入ってまず見たのは、包帯ぐるぐる巻きのブラックの姿。

「どうしたんだ？・・・って、まさか」

「・・・豹太にやられたんだよ」

機嫌悪そうなブラック、そして傷口に薬を塗っているフコンの姿。

「で、ブラック、結局どっちが勝ったの？」

するとブラックは藪から棒に

「ドロー」

の一言。

「あ・・・そうですか・・・」

この話はタブーだな。

「そう言えばミィやポチ太郎は？」

「ポチ太郎はあつちで山田とDS、ミィは新たな客捜し」

そう答えたのはフコン。

「あ……そうなんだ」

「どうした？何か用か信良？」

「あ、いや、ただ、あの事件でいろいろと助けてもらって、お礼してなかったなと思って……」

そう言っつて俺は手荷物の茶菓子テーブルの上に置く。

「安物だけど……まあ、一応ね」

「おう、悪りいな」

ブラックはさらに包帯だらけに。

「……あの、俺……」

「んあ？」

「これから、真理子さんと積極的に会話とかしていこうと思っつて
「んあ？」

「……」

「せつかく人を好きになれたんだから、その恋を楽しまないとい
て思っ……」

「……ハッ」

「えっ!？」

ぶ、ブラックに鼻で笑われた!!

「何バカ真面目な事言っただよ、信良のくせに……」

「なっ……」

「ま、スーパーオクテのお前には無理だろうけどな」

「んな事、やってみなきゃ分からないだろ」

「ハッ、じゃ、せいぜいかんばるんだな」

「今に見てるよ、あっという間に真理子さんと親しくなってやる
!?!」

俺は自分自身に誓った!!

中学卒業まであとちょっと、その間に真理子さんにこの思いを伝
えてみせる!!

「絶対に……!!」

ある時、猫姿の私の目の前を、見た目冴えない男子が、横切った。
多分、地味でオクテな少年。

そして、その少年からは、恋の臭いがした。
片思いの恋の臭い。

「新しいお客さん、見つけーけ!!!」

私は、今までいた木の上から飛び降り、彼の元へ。

今、新しい恋が、始まるうとしている。

最終話「終わりとそれから、そして始まり」（後書き）

今までご愛読、ありがとうございます！！

無事、このストーリーも最終回を迎える事ができました！！

思えば最初、ギャグ・コメディー重視でいこうと思って書いたこの作品、最後の方は思いつきり笑えないシリアスマードになってしまいました・・・まあ、うん、しょうがない事です！！（開き直り）

何はともあれ、今までこの作品を読んで頂き、本当にありがとうございます。感想とかあったら、是非送って頂けると嬉しいです。

では、またいつか！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3965j/>

動物恋愛相談所～恋のお悩み解決します～

2010年10月10日22時05分発行